

韓国農家主婦の地位変化要因

韓国ソウル大学

王
フン

仁
イン
槿
ジョン

一、はじめに

「農家主婦」は農家の農業經營主の婦人を指すのだが、定義的に
は農家生活經營上の意思決定者(五〇%以上)、"farm homemaker"
である。それから「地位」とは、特定家族の役割構造の中で微視的

に把握する事が出来るが、又巨視的・一般化的に農村の場合を全一體として都市家族・家口員、又は外国の家族の地位と比較する事が出来る。本小稿では比較論的な立場は取らず農家主婦の経年的地位変化に影響を及ぼす先行的乃至は現在的な主要な要因範疇に関して選択的に概観する事にする。

二、伝統的農家婦人と終戦及び一九六〇年代の衝撃

今日でも特に国家社会発展が極度に遅れている開發的発展途上国を中心とする第三世界では諸種の差別と開拓寄興潛在性が適正的に認定されていない為、大変な問題になっているのだが、その比重は世界人口の五五%を占めている農村人口に注目する時、革新的な視角で農村女性問題に接近して居る今日である。

或専門家は韓国の歴史的時代区分に依って、朝鮮末期又は朝鮮時代全体の家族を「伝統家族」と規定しその以後の家族を「現代家族」と見る接近日を取つて居るが此の様な接近日は問題点を持つて居ると思料する。何故かと言ふと非等価的ではあるが伝統家族と現代家族は共存するからである。勿論、前提的に総合的な観点で伝統家族と現代家族の定義的規定化が必要不可欠だと思う。五〇年程度が経過した今日の激動化の韓国家族は特に農村の場合、一九四〇年代と比較したら現代家族と規定出来ると思う。だから逆に一九四〇年代の韓

国家族・韓国農村家族は伝統家族と見る事が出来る。
韓国では「解放」と表す一九四五年八月十五日の終戦は極端な社会的混乱と米国文化の一方向的飽和、南朝鮮だけの脆弱的政府樹立、冷戦的な新生政府の全方位的紙面上の政策プログラム、六・

後

二五動乱（朝鮮戦争）の残虐性と外来文化の加一層の押し寄せ、それから一九四九年農地改革に依る農村社会の結果的変換の胎動と進行等の非正常的な社会変動を経過したが、国民全体、農村人、それから農家主婦に対して強力な衝撃を直接・間接的に及ぼした。

一九六〇年初、最小限の基本欲求的必要を充足する様になったのだが、軍事クーデターの時代に没入した。此の軍事政権（約十八年間）に対する評価は合意を見る事は不可能だが、「工業輸出主導」の國家基本発展戦略の下で近代化を進めたが、特に農村開発の為の国家企画的社會變動計画としての「セマウル運動」は農村の封鎖性、孤独性、宿命性等を打破した。一種の微視的統合農村開発計画で自然部落を単位としたので農村女性の参加性は高水準であつたし、例を取れば一夫多妻の伝統的慣習は完全に打破してしまったのであつた。強制的乃至は非教育的な農村指導事業（農業普及事業）は米国の制度の導入、適応、変容に依つて基本的に農業改良と生活改善を大々的に展開して特に農村女性を積極的な参加型に作った。青少年指導の場合も「四H俱楽部」という組織の下で若い女性を家から引張り出したが、農家主婦の場合は勿論の事でした。そこで一九六〇年初から三〇年間は農家主婦の発展的変容を現代家族的見た時期だと思料する。

三、今日の農家主婦の地位と変化要因

今日の韓国の発展は課題と逆機能的問題点が山積してあるけれども、相対的に言って画期的な事象だと解釈出来ると思う。「外債」「國論」が飽和だった時期もあったが北韓（北朝鮮）の「自主的國家

「發展戰略」の結果が現在失敗とは言えないが非効率的である事は否定出来得ない事実になっている現実である。

大量の農村・農家人口の向都離村の為、農村で深刻な人力難が発生して居るのだが、都市の場合も殆ど同じ位である。農村・農家人口の年齢構造が脱生産年齢層になって極端な老齢化、女性化（農業労働参加の男性並）、したがって劣悪化と共に不足化を見て居るのだが、機械化での、補完は不完全である。特に老齢化と女性化の進展は過疎家族化の下で農村女性、即ち農家主婦の地位を画期的に提高する直接的な要因になつて居る。

韓国全体を見ると数年前から過去数十年間の体制的な構造から脱

中央集権化、脱権威主義化開放自由市場化、男女平等化、それから自由主義化への果敢なる変換と國際化の劇的な進行は従属性的な地位と役割の位相の韓国女性、それから農家主婦の地位向上に間接的に大きく影響して居る。勿論西歐化的傾向の価値観の流入と受容が情報化と共に現代化を促進して居る。「韓国女性開発院」が公共的政策研究機関として設立されて居るし数多くの女性圧力団体が活躍して居る。

要約的に見たら、農村の農家主婦の今日の地位は相対的な意味で、それから一般化的な意味で劇的に大きく向上を見て居ると言う命題が成立するとと思う。その主要な規制的要因範疇を整理すると、(a) T.V.を中心とする外部の近代的情報への飽和的露出、(b) 一般的の教育水準、特に女性教育の画期的向上、(c) アメリカを中心とした西歐的な強力な影響の家族像、夫婦像に対する衝撃、(d) それから核家族化の一般的進展に依つて家族役割構造上の「重要な他者」("Significant others") の不存在等が指摘される。(e) それから多くの残村農

家が年老の父母夫婦に依つて維持されている現状で、相対的にもつと強力な忍耐と意志力それから持久力を持つて居る農家主婦に対する夫としての農業經營者の平等的認定、(f) 不足な農業労働力の実質的補充、(g) 唯一の余暇生活面と言える野外での仕事と夕飯の後の老夫婦のT.V.視聴に依る「伴侶的」な時間を持つ事が平等の夫婦の感覚を深めるのだが、此れが相対的に農家主婦の地位向上に寄与する。終わりに、(h) 共同意思決定の傾向も強化して居るし、金錢管理とか日常生活品購入行動に於いて農家主婦の方が発言権乃至は、行動権をどんどんもつと持ち始めて居る。

四、おわりに

日本の場合もそうだけれども、韓国の在村農業後継者男性の結婚難は深刻であつて外国から新婦候補者輸入の問題が論議されて居る。新婦側の結婚要求条件はとてもきびしい。「生活の質」の一般的提高と共に高度の希少価値性を持つて居ると思料される特に若い農家主婦達は彼らの地位が家族内で（それから社会的に）もつと自律的乃至は主觀的に、それから他立的に向上されて行くと展望される。政治的・社会参加に於いても第一線に立つのですが、「新國際農業秩序」("GATT-URUGUAY ROUND NEGOTIATION") の挑戦に対する反応に於いて農家主婦の役割を前向きに注目する次第である。結局は農家主婦の地位は加一層提高されるだろう。